# 獅子・狛犬像

一対
木造漆箔
平安時代後期（獅子）
南北朝時代（狛犬）
教王護国寺蔵

本誌先々号に、東寺伝来の古式な獅子・狛犬像の紹介とその史的意義についての文章を試みた[1]が、ここに論じようとするのは、同寺の所蔵になるもう一つの獅子・狛犬像である。この像を本格的な考察の対象として選んだ論は今までにないけれど、展観などに際しては、およそ鎌倉時代の作と理解されていたように思われる。ここに本像を改めて取り挙げるのは、筆者自身のものも含めて、従来のそのような認識に対して疑問を感じたからに外ならない。

本像の像底（腰―後肢部）には修理に当っての次の朱書銘がある（挿図1）。

〔阿形（獅子）〕
東寺八幡宮師　駒犬
子也御□□破損間下□
□綵色令沙
汰奉寄進□
金剛珠院
僧正亮□
絵士□佐
左京允

〔吽形（狛犬）〕
東寺　八幡宮
□□□□破損間□□□
下綵□令沙汰奉寄進□
金剛珠院僧正亮恵
大仏師大夫法眼康正
絵士□佐左京□
塗士平井秀治
弟弥治郎□□
大仏師大夫法眼康正
弟□次郎
塗士平□□□進□

このほかに両像の両前肢底面にもそれぞれ「東寺」という朱書がある。

これにより、本像が東寺鎮守八幡宮に安置されていたこと、および塔頭金剛珠院僧正亮恵の沙汰により、大仏師法眼康正が中心となって修理したという事実が知られる。銘に年紀はないものの、康正が東寺大仏師となったのが天正五年（一五七七、阿刀文書[2]）のことで、それ以降、塔・講堂・金堂・南大門等の仏像修理・新造のすべてを彼が担当していることからして、本像の修理もこの期のそのような復興事業の一環だったと考えられる。

＊



挿図1　像底（上が阿形、下が吽形）

本像は、無角・開口の獅子と有角・閉口の狛犬から成る一対。いずれも前肢を揃えて引き、胸を張り、上体を伸ばしたポーズで、院政期に多いうなだれるような姿勢の和様の獅子・狛犬とは明らかに異なる。東寺伝来のもう一組の像と同じように、奈良様のポーズといえる。阿形・吽形とも、剝き出しの丸い眼球と太い口上のひげ（彫出）が共通するが、たてがみの毛束の先端は、阿形が体によく付くのに比べると吽形は反り返りが多く、また尻尾は阿形が涌き登る雲気のような特殊な形（挿図2）をしているのに対し、吽形は（一部後補が混るとはいえ）仏手柑に似た、中・近世の獅子・狛犬像によくある形である。このほかに吽形の胸部の舌状の盛り上りは、狛犬像に特有な霊気表現であろうか。

両像の大きさは次のようにほぼ同じであるが、吽形が前肢をわずか前に出している分、奥行きが増している。

| | （像　高） | （前肢先-尾先） | （肩　張） |
|---|---|---|---|
| 阿形 | 七〇・七 | 四六・一 | 二八・二 |
| 吽形 | 七二・三（角を除く） | 五〇・三 | 二七・三 |

いずれもヒノキを材とする。阿形の木寄せは、胸の位置で前後に縦二材を矧ぐのを基本とするが、このほかに、前頭部の位置で縦に、鼻上辺で横に面相部上半を矧ぎ、さらにまた前後材の矧ぎ目より少し前方とたてがみの下辺で鋸を入れ、後頭部に別材を填めている。

挿図2　阿形の尾

開口する獅子像の口中を彫り易くするため面相部を割る手法はよくあるのだが、本像の面相部の矧ぎは口中まで至っておらず、それとは関係ない。また、両前肢先の前半、両後肢先のすべてを別材矧ぎとする。尻尾は体部後半材と共木か。体部に内刳りを入れるが、あまり深くはないようである。体部表面の要所と像底に麻布を張り、漆箔仕上げ（後補）とする。

吽形は、背半ば—腹部前の位置で前後に縦二材を矧ぐのを基本とする。このほかに、角、左前肢先の前半、両後肢のすべてと下腹部、尻尾の半ばより先をそれぞれ別材矧ぎとする。内刳りはないもようである。体部に布張りはないが、像底には阿形のと同じ麻布が張られる。漆箔仕上げ（後補）。

＊

このように両像は一対としての調和が図られているのだが、よく見るとつくりは明らかに異なり、阿形に重厚な古様があるのに対し、吽形は阿形に倣った形跡が歴然としている。例えば、前頭部に出た数条の筋肉、口の周囲の粘膜帯、盛り上った口の上ひげ、たてがみの毛束先の反りなど、いずれをとっても阿形がより自然で落ち着いた表現なのに比べて、吽形はそれほどの力はない。古像に似せながらもどこか散漫で装飾的な印象は、岡山県吉備津神社の獅子・狛犬像に感じられるものに近い。

ではいつ頃の製作かというと、適当な類品がないのだが、目を剝いて威嚇的な表情ながらどこか力を抜いた阿形の趣きが、法隆寺講堂四天王像（正暦元年・九九〇）の帯嚙いの獅子にも通じるところがあり、もう少し幅をとって十世紀後半に位置付けることができよう。一方の吽形は、その装飾的で線の細いつくりが前記吉備津神社像と

同質のものといえ、同じ南北朝時代の作[3]と推定される。

＊

阿形像の十世紀後半造立が認められるとすれば、わが国の獅子・狛犬像の現存遺例の中で東寺旧蔵像（九世紀前半）に次ぐ古例ということになる。東寺旧蔵像が同寺草創期の金堂あるいは講堂[4]の仏前に安置され、その製作も当初の講堂諸尊とほぼ同時期と推定されるのに対して、本像は鎮守八幡宮旧在であることが銘記から分かり、同じ八幡宮安置の武内宿禰像（十一世紀前半）より若干遡る頃の製作である。

前述のように、両前肢を手前に引き胸を張る颯爽とした構えは奈良様の伝統を継いでいる。東寺旧蔵像や本像に見られるように九・十世紀の遺品に奈良風が残るのは、仏像史などこの期の近接分野の実態に照しても理解し易い。またさらに、これも仏像史の動向に似た現象だが、十一世紀以降、和様の獅子・狛犬像が一挙に増加する。白山比咩神社像（十一世紀前半）、御上神社像（十一世紀後半）、厳島神社像（当社に残る十四軀のうちもっとも古いもの。十二世紀後半）などがそれである。その背景には、獅子・狛犬の製作者が仏師だという事情があるのだろう。従って和様の獅子・狛犬表現への追及が、すでに十世紀末からあったものと推測されるのだが、遺品の限られている現在、それを辿り得る手懸りは少ない。本像と白山比咩神社像とはわずか数十年の隔りがあるだけだが、奈良様と和様という表現のギャップは、その間に、仏像と同様に、獅子・狛犬像においても和様の完成という様式上の急変のあったことを、雄弁に物語っている。

（伊東史朗）

〈注〉

1 伊東史朗「東寺伝来の獅子・狛犬像」（『学叢』一五　平成五年）

2 「東寺大仏師職事
可致存知候　寺務未
補之間宜勤仕恒例臨
時之寺役之由為供僧中
御下知之所候也仍執達
如件
天正五年七月廿八日　目代浄仙
大夫法眼康正　」

3 根立研介「東寺大仏師職の系譜―文献資料の検討を中心にして―」（『仏師と仏師組織に関する総合的研究』昭和六十・六十一・六十二年度科学研究費補助金研究成果報告書　昭和六十三年）
吉備津神社像は、建久四年（一一九三）、重源の社殿造営（『南無阿弥陀仏作善集』）に関係づけて、鎌倉時代の作とする見方もあるが（小林剛「吉備津神社の狛犬」『大和文化研究』三―二一　昭和三十四年）、私見によれば、むしろ観応二年（一三五一）に社殿が焼亡し、応永三十二年（一四二五）に正遷宮が行われる間の早い段階での作とした方がよいように考えられる。

4 筆者は前稿（注1）で、本像が金堂旧在かも知れないとした。しかし東寺には、この獅子・狛犬像と同時期・同一工房（あるいは同一仏師）の作とみられる獅子像一軀が伝存している。これが講堂の大日如来像と金剛波羅蜜像の各台座に置かれた獅子（『東宝記』第一）のうち一体が残ったものの可能性が強いことからすると、獅子・狛犬像も当然講堂安置といえるわけで、ここに旧安置堂宇を金堂または講堂と訂正する。